

Title	編集後記
Sub Title	
Author	平野, 裕之(Hirano, Hiroyuki)
Publisher	慶應義塾大学大学院法務研究科
Publication year	2013
Jtitle	慶應法学 (Keio law journal). No.27 (2013. 10)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA1203413X-20131025-0278

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

編集後記

「悲願の日本一!!」(涙…)。もちろん野球の話ではない。10月10日に、2013年度の司法試験の合格発表があり、慶應ロー修了生からは201名が合格。合格者数そして合格率共に日本一、数と率の二冠達成である。合格された修了生には心から祝福したい。運悪く不合格になった者にはそれぞれの方向で今後の健闘を期待しよう。

旧司法試験・現行司法試験(新司法試験)を通じて、慶應義塾大学が合格者数でトップに立つのは初の快挙。「慶應ローは一日にしてならず」。ここに至る道のりは長い。旧司法試験開始以来廃止まで毎合格者を出した大学は、10校に満たない。そこには慶應義塾大学は含まれていない。「法の中央」と謳われた中央大学から断トツの合格者が出ていたが(昭和40年代は凄まじい)、多摩への移転後に東大にトップを取って代わられる。他方、法職課程を擁して虎視眈眈と司法試験に力を入れていた早稲田大学が昭和50年代半ばに一時期トップに躍り出て、トップスリーの時代となった。その時、未だ慶應義塾大学は蚊帳の外。時が平成へと変わる頃から、渋谷の某予備校の開校と時を同じくして、慶應義塾大学の躍進が始まる。法曹志望者も増えて行き、中央に代わりビッグスリーの一角を占めるまでになる。以上は旧司の話である。

慶應義塾大学には、お互いに足を引っ張ることはなく、自分たちの中から1人でも多く合格者がでるようみんなで助け合う雰囲気がある。明治12年の「福澤先生」の言葉に発する「社中協力」である。「社」とは慶應義塾を構成している教職員、学生、卒業生を1つの「結社」と見たものであり、宗教団体にも匹敵する恐るべき結束である。塾員(卒業生)の結束力はこの社中協力の精神の賜物である。慶應ローの成果の原因の1つは、この雰囲気がローにも受け継がれたことである。また、学生が不断に努力をし、教員も学生の足を引っ張らないように努力(笑)をした賜物である。

実務では事件を扱い、そのための能力を試す司法試験では事例の分析をして論点を抽出した上での法解釈論が要求される。抽象的な講義ではそのための能力は身につかない。未修では徹底して講義で膨大な基礎的知識を暗記させ(ソクラテスは無理な話)、既修からは徹底して事例問題で事例分析能力を鍛える(知識を詰め込むための講義は不要)。教員がやりたいないしできることを行う「教員中心のロー」ではなく、学生のために何が必要かを分析してそれを行う「学生中心のロー」であることが(度が過ぎると予備校と等しくなる)、上に述べた学生の足を引っ張らないロー教育である。「社中協力」と「学生中心のロー教育」がある限り慶應ローは無双である。

(編集委員を代表して 委員長 平野裕之)